

英語のいわゆる Fragmentary Sentence について

宮 井 捷 二

1

英語の fragmentary sentence⁽¹⁾ (以下 FS と略す) とは主語または述語 (動詞) のいずれか一方または両方を欠く文を指す。ただし、命令文を除く。主語と述語を備えた文を full sentence あるいは major sentence などと呼び、命令文もその中に含める。これはいわゆる sentence type の問題であるが、Bloomfield (1933 : 172) はあらゆる言語の sentence type を full sentence と minor sentence の二つに分けたことは周知の通りである。minor sentence はここで言う FS に相当する。

英語においては、FS は話される英語 (spoken English)、書かれる英語 (written English) を問わずかなり多くみられる。たとえば、日常会話、文学作品、新聞、雑誌など広範囲の英語にあらわれる。Bowman (1966 : 37) の話される英語のある corpus についての調査によれば、その corpus における major sentence と minor sentence の割合は 2 : 1 であったとのことである。すなわち、自由に話されている日常の会話においては、全体の約 3 分の 1 が FS であるという報告であって、このような調査を容易にできる立場にはない外国人研究者にとっては Bowman の調査結果は大変有益である。

具体的な例は英語の初歩の教科書などからも得られる。Sledd (1959 : 277) は彼の言う sentence fragment の例として次のようなものをあげ、これらはもっとも普通にみられるものとしている。

“Who won the ball game?”

“The home team!” …………… (1)

“What was the score?”

“Nine to eight.” …………… (2)

これら二つの FS はいずれも wh- 疑問詞を含む疑問文への応答としての典型的な FS である。

伝統的に、文は最少限一つ以上の主語 (subject) と述語 (predicate) からなるという考え方があって、主語+述語 (S + P) 形式の文の議論が中心で、FS はだいたい軽視されてきた。FS を扱った場合でも、どの FS も S + P 形式の文の省略形だとして簡単に処理されることが多かった。しかし今では FS を単に省略 (ellipsis) という概念で説明できないことは明らかであるとされている。その第一の理由は、改めて「何が省略されたか」と考えても多くの場合省略されたものが判明せず、そのような方法では言語学的に納得のいく説明ができないからである。FS を S + P 形式の文に対する二次的なものとするよりは、言語の重要な部分をなす FS をそのままの形で記述しようとする方が言語学的により生産的で「科学的」(cf. Firth, 1964 : 175) だと言える。

もっと具体的に言えば、文というものは何も S + P 形式でなくても、たとえ構成要素が一つだけ (“one-member sentence”) でも、立派に文としての存在理由があり、その

acceptability または grammaticality は S + P 形式の文と変りないのである。この小論は FS を S + P 形式の文と同様に完全な文と認める立場から、FS の言語学的な扱い方について一つの提案をしようとするものである。

たとえば科学的な論文に FS が多く含まれるということは普通考えられないが、人間の感情などを表現する文学作品等に FS が多いということは十分考えられる。たとえば感情的または原始的な言語表現が FS の形でなされることが多いことはよく指摘される。(たとえば, Jespersen, 1937: 89)。そのような例としては、

- Heavens! (3)
 Murder! (4)
 Impossible! (5)
 My ideas obsolete!!!!!! (G. B. Shaw) (6)

などがあげられる。このような感嘆文、及び感嘆符を伴わないその他の FS の記述について Langacker (1968) は次のように述べている。

“They (=exclamations and fragments of sentences) belong to a language just as much as full sentences do, and therefore would have to be described in any full¹ linguistic description; no one proposes to leave them out. There are a number of reasons, however, for placing a great deal of emphasis on full sentences and comparatively little emphasis on shorter expressions.” (ibid. pp. 33-34)

Langacker 自身言語はあまりにも普遍的であるので、われわれは言語を当然のこのように考えていると述べているが (ibid. p. 3), 同様に FS も議論の必要がない、当然の言語現象と考えがちである。しかしながら、S+P 形式の文の記述が完成すれば、それがそのまま FS にも当てはめられるような結論を下すことは適当ではない。何故なら、それは言語現象の大きな部分をはじめから排除して理論をつくり上げることになるからである。別の観点から言えばこのことは次のような諸問題に関係する。すなわち、変形文法の仮説 S→NP + VP の妥当性、深層構造 (deep structure) から表面構造 (surface structure) への変形操作、特に FS の説明という点では、おそらく非常に複雑なものであろう deletion の規則等に関する疑問をどのように解決するかということなどである。

Chomsky (1965) は competence (言語能力) と performance (言語運用) をはっきり区別して、言語運用は言語能力を完全に写しているものではなく、実際の言語運用にはいろいろな deviation (逸脱) がみられると言う意味のことを述べている。はたして、変形文法において FS は逸脱しているのかどうか、あるいはその文法性逸脱の度合 (degree of deviation from grammaticalness) (cf. 大塚, 1970: 342) はどうか問題である。

FS に関する意見の発表がなされていないからよく分らないが、変形文法では FS はおそらく reduction rules (たとえば, Langacker, 1968: 120-3) で説明されるのであろう。場合によっては、すなわち FS の脈絡によっては、verb deletion などの操作が行われ表面構造で FS が生じるとするのであろうか。しかし、この点については reduction rules によってある要素が reduce されると考えるより、はじめからその要素が存在しないと考える方が自然であるような FS も多いのではなかろうか。言いかえれば、深層構造においてすでにその要素がないという考え方で、先にふれた仮説 S→NP + VP の妥当性の問題に関係する。たとえば、前にあげた (3), (4), (5) および (6) はむしろ深層構造により近い構造を

備えた表現と言えないだろうか。

さて文以上の言語的単位を言語学的に分析することはまだまだ序の口で (“Analysis beyond the sentence is presently in a rather primitive state.”) (Hendricks, 1969), それに関する研究成果はまだまだ小さいことは事実である。しかし, FS を記述する場合, FS がおかれている状況すなわち脈絡 (context) を考慮しない訳にはいかない。文だけでなく文より大きい単位 (units larger than sentences) あるいは文と文との関係 (“relations between sentences”) (Fodor & Katz, 1964 : 354) などを考慮する必要がある⁽²⁾。文と文との関係と言っても Chomsky (たとえば 1957) などの言うある言語の文法体系の中ではなく, 同じ discourse (談話) 内での文と文との関係すなわち前後関係を問題にしなければならぬ。Harris (1952) は, 記述言語学は文の単位のところとどまっているが, それ以上の長さの言語的単位を扱ってもよいのだとして, 周知のように discourse analysis (談話分析) を行っている。Harris は context ということばを使ってはいないが, 結局は context を考慮して分析を行っていることになる。この小論では Harris とは目的も方法も異なるが, FS の機能を明確にするために文を単位として分析を行い FS の脈絡への依存のあり方を調べることを談話分析と呼ぶことにする。

脈絡については, J. R. Firth, B. Malinowski をはじめとしてその他の言語学者が今までにそれぞれの考え方を発表していることはよく知られている。次の章ではこれらの意見を参考にして FS と脈絡の関係を検討する。

2

英語の FS を体系的に記述しようとすることは, 当然英語の文したがって英語という言語全体の記述につながる。以下において行う作業が成功してもしなくても上のことが当面の課題であることには変りはない。

さて, FS を扱う場合無視できないのは, 一般に FS は S + P 形式の文にくらべて不完全な形式なので, はっきり形にあらわれたものと形にあらわれないものとの関係をどのように考慮するかということである。したがって, 以下の FS の分析においては, 言語の最も重要な要因として addresser (話し手), addressee (聞き手), message (伝達されることがら), form (形式) の他に脈絡を常に考慮する。(これらの言語の要因については, 1967年の第2回理論言語学国際セミナーにおける R. Jakobson の講義を参照した。)⁽³⁾。たとえば, 次のような FS は脈絡を考慮しないで説明することがどうしてできようか。

‘Father Flynn.’ …………… (7)

‘Now iodine.’ …………… (8)

‘Make money.’ …………… (9)

これらの孤立した文を元の環境に戻すと, “meaningful” (Lyons, 1966) であることがよく分る。すなわち, これらはその脈絡において文法的にも意味の面でも acceptable である (cf. Lyons, 1966)。(8) の脈絡はもちろんすべて言語によって与えられているが, これがもし話される英語における発話であれば, 非言語的脈絡に強く依存している FS である。

‘Well, so your old friend is gone, you’ll be sorry to hear.’

'Who?' said I.
'Father Flynn.'

(J. Joyce)

Ali came in, his pink soles flapping on the floor-boards, carrying a bottle of water from the filter. "The back door humbug me," Scobie explained. He held his hand out over the washbasin, while Ali poured the water over the wound. The boy made gentle clucking sounds of commiseration: his hands were as gentle as a girl's. When Scobie said impatiently "That's enough," Ali paid him no attention. "Too much dirt," he said.

"Now iodine." The smallest scratch in this country turned green if it were neglected for an hour.

(G. Greene)

(9) が命令文でないことは脈絡を補うことによってはじめて分る (cf. Salmon, 1963)。

"What do the Syrians do?"

"Make money. They run all the stores up country and most of the stores here run diamonds too."

(G. Greene)

もちろん、このように FS の实例を元の環境に戻すことが FS のような言語現象を言語学的に説明することでは決してない。FS と脈絡の関係を言語学的に究明することは大変難しいことではあるが、不可能ではない。当面の方法としては、FS と脈絡の関係を意味の面から考察するのではなく、そのような関係にみられる「観察できる特徴」(Chomsky, 1964: 195), すなわちむしろ脈絡の形式的な要因を類型化して、いわば context pattern⁽⁴⁾を探ろうとする試みが考えられる。しかし、形式的な面を重視すると言っても、ちょうど語の意味が脈絡によって決定されるように、FS の意味も脈絡によって明らかにされることは当然であって (cf. Ullmann, 1962: 32 & 49), そのことを全然考慮しない訳にはいかない。

英語には種々な FS がみられるが、それらは雑然とあるのではなく、何らかの法則に従って存在するのであり、しかもそれは S + P 形式の文の場合と違った法則にもよっているはずである。FS が生じる原因について考えてみると、まず、すべての文は脈絡の影響を受けるがその程度には差があることが注目される。概して FS の方が S + P 形式の文よりも脈絡への依存度 (degree of dependence on context) は大きい (cf. 佐々木, 1966: 109)。たとえば先にあげた (1), (2), (7), (8) および (9) は脈絡と密接に結びついていて、その脈絡の外では存在し得ないかまったく本来の機能を果せない FS である。またこれを意味の面からみれば、これらの FS は (3), (4), (5) および (6) にくらべて脈絡の外では意味がよりあいまいになる。このように FS の中でも、脈絡に強く依存しているものを Bowman の用語を借りて dependent fragmentary sentence と呼ぶことにする。⁽⁵⁾

一方、上のような脈絡の影響というより、むしろ話し手の内面的要因によると考えた方が妥当な FS がある。人間は常に S + P 形式の文であらわされるようなより論理的なまとまった考えのみを表現する訳ではない。前にもふれたように、感情的な、ぼんやりとした、また

ある意味では原始的な内容は、S + P 形式でない文で表現されることが多い。現実のテキストでそのような FS をそれと「同じ意味をもつとみられる」S + P 形式の文と置き換えることはできない。その理由の一つは、その脈絡における本来の FS の機能を変えることになるからである。(この点は Bowman(1966)の意見と異なる。) 上のような exclamatory FS を含めて、脈絡への依存度が比較的小さい FS を一般に independent fragmentary sentence と呼ぶことにする。このようにして、英語の FS は dependent fragmentary sentence と independent fragmentary sentence の2つに大きく分けることができる。これらをさらに分類して整理し、将来の検討に備えようとするのがこの小論の主な目的である。

3

従来の文法は FS の扱い方に苦心しているようである。たとえば Jespersen (1924 : 306-7, et al) は「旧式な文法学者」が一語文を省略という概念で説明していることを批判して、省略は絶対に必要な場合以外には認めるべきでなく、John!, Alas!, Yes, No などの一語文は状況に応じていろいろに解釈できるから、これを特定の S + P 形式の文の省略としないで、そのままの形で完全な文とみなすべきであるという意味のことを述べている。さらに、*Analytic Syntax* (pp. 89-91) では amorphous sentences (ここで言う FS とだいたい同じもの) という章において、amorphous sentences には一語文のような簡単な形式のものから複雑なものまで種々あり、これらのものには unanalyzable (分析できない) のものと half-analyzable なものがあるとして、これらの構造を分析している。そして answer や retort (口答え) の場合に unanalyzable や half-unanalyzable な文が多いと述べている。このように、Jespersen は *A Modern English Grammar on Historical Principles* などでも、FS についてかなり示唆的な言及をしている。しかも answer や retort の場合の amorphous sentences というのは明らかに脈絡を考慮している。しかし、このような断片的な脈絡ではなく、前にも述べたように FS と脈絡の関係を一般化させて context pattern を追求すべきである。そうすれば FS の扱い方もそれほど難しいものではなくなる。

周知のように、脈絡については Firth が B. Malinowski の context of situation という考え方 (cf. Malinowski, 1923) を言語学のいろいろな level にとり入れようとした。たとえば、**bo : d** という形態素も contextualization (process) を行なわないとその品詞を決定することができないとした (Firth, 1957a : 26) が、これは要するに positionally に品詞を決定するやり方と根本的には同じである。しかし contextualization を syntax の面にとり入れることに関するまとまった考えが発表されなかったこともあって (cf. Lyons, 1966), たしかに、Langendoen (1968 : 40, 65-6) に指摘されているように Firth の *Syntax* についての考え方は明瞭ではない。

Firth が開拓した脈絡に関する理論は彼の後継者たるロンドン学派言語学者等によっていろいろな形で発展させられた。Firth が主張したであろうように、文はその脈絡の種類によって分類されるべきであるなら、その前に脈絡の分類が考えられるはずである。事実、Firth 自身も脈絡の分類をしている (Firth, 1957a : 35-6) が、Enkvist, Spencer & Gregory (1964) は主として文体論的目的で脈絡を分類することを試みている。

“Context, then, must be defined on several levels, and contextual components

can be further classified into various, elaborate patterns. To classify all categories of context *a priori* is impossible, not least because contexts vary from one language, culture and time to another.” (ibid., p.30)

と述べ、一つの試みとして、context を textual context と extratextual context の二つに大別している。これらをさらに分類しているが、たとえば extratextual context の下位区分のうち、speaker/writer, listener/reader, context of situation and environment, gesture, physical action などは FS の脈絡の分類を考える上にも示唆的である。

何らかの形で FS の分類を提示している主なものは、Jespersen (1909-47), Gardiner (1960), Hockett (1958), Nida (1960), Salmon (1963), Fowler (1965) および Bowman (1966) である。

I. Dependent Fragmentary Sentences

dependent FS は脈絡に強く依存している文である。これらの FS はそれぞれの依存している脈絡によってさらに分類できる。前に述べたように、脈絡は言語的脈絡と非言語的脈絡に分けることができるから、このグループの FS もこの基準によってさらに分類できる。このグループの FS の分類においては、言語の極めて基本的な面をまず考慮しなければならない。たとえば、言語は基本的には話し手 (addresser) と聞き手 (addressee) から成り立つものであるというような分けきった事実を無視することができない。以下の分類においては上の二つの要因を含めて、先にあげた五つの言語的要因を基準にして考察する。

(1) Questions confirmatory, supplementary, etc.

これは相手の utterance そのものについて疑問を抱く場合で、疑問の種類にはいろいろ考えられる。ただきこえないのでききかえすといったものから、驚きに近い感情を表わすものまで種々さまざまである。この種の FS は addresser-addressee context で生じるが、addresser の要因が目立っていると説明することができ、Salmon の stimulus sentence (その反対は response sentence) の中に含まれる。さらに次のように分類できよう。

(a) Repetition or restatement type

‘For another, it’s nice to have flowers on my anniversary.’

‘Anniversary?’ (R. Anderson)

これは先行する文に含まれる語をそのままの形でくりかえしたものである。

‘What are they, in your opinion?’

‘In my opinion?’ (T. Williams)

この場合には代名詞が変えられている (cf. Bowman, 1966: 40)。次の例も同様だが、感嘆符を伴う例を含んでいる。

‘Then who’s going to do it? Are you?’

'I? I!' (T. Williams)

さらに次の例では前の文中の名詞をくりかえすことには変りはないが、前文にない形容詞を伴っている。

'There is always a chance.'
'A big chance?' (G. Greene)

また、まったく別の語句でなされる場合がある。

'Uh-what time is it?'
'Fifteen of seven, ma'am.'
'So late?' (T. Williams)

この種の FS に似たものに次のような疑問詞 (who, what, where, when, how, why など) を含む FS がある。

(b) Wh-? typ

やはりこのグループも先行する文に対しての supplementation あるいは addition の要素を含んでいる。

'Well, so your old friend is gone, you'll be sorry to hear.'
'Who?' said I.
'Father Flynn.' (J. Jofce)

'There's been a horrible accident,' said cook. 'A man killed.'
'A man killed! Where? How? When?' (K. Mansfield)

'... I was about to commence the composition of an article.'
'Upon what?' (A. Bennett)

この最後の例は I. (2) Additions to preceding sentences に関連深いものである。言うまでもなく、(a) と (b) は構造と (話される英語の場合には) intonation ではっきり区別することができるが、次のような例は (a) と (b) の borderline case と考えられる。

'You're doing well enough, Willy!'
'Enough for what, my dear?' (A. Miller)

(2) Additions to preceding sentences

このグループの FS は、話し手や聞き手の要因よりは message の要因が前面に出てきていると考えることができる。先行する文に付け加えてそれを補うもので、さらに2つに分類することができる。たとえば、

Suddenly I heard a noise. Under the oak tree.
(L. M. Myers) …………… (10)

And she took it all—just as usual. Absolutely composed.
(K. Mansfield) …………… (11)

これら二つの FS では、(10)の方が(11)よりも先行する文との関係が(構造上)より密接である。(10)はたとえば、“linked structurally to preceding utterances” (Salmon, 1963) (構造上前の発話につながっている)や“the use of a full stop instead of lighter punctuation” (Fowler, 1965: 675) (軽い句読点の代わりに終止符を使用している)と説明されているものである。すなわち、(10)の場合には二つの文の間の終止符を除去することによって新しい完全な S + P 形式の文ができ上るのに対し、(11)の場合、

And she took it all just as usual absolutely composed … (12)

のようにやや不自然な文となるが、(12)の“absolutely composed”は従来の文法では free adjunct とか predicate appositive とか extraposition などと呼ぶのであろうか。

このグループの FS は先行する文と speaker/writer が同一であるのが原則である。そして上の二つの典型的な例にみられるように、このグループの FS は先行する文にもっとも密接なものからもっとも密接度が低いものまでいろいろの種類が考えられる。先行する文との関係があまりにも“loose”あるいは“free”であれば、後で扱う independent FS に分類される。したがって、当然、その境界線付近には borderline case が考えられる。

(a) Closely connected with preceding sentences

To me you are. (Slight pause) The handsomest. (A. Miller)

I bet you forgot how bashful you used to be.
Especially with girls. (A. Miller)

We could both drink it. Since we both have birthdays.
(G. Axelrod)

次の例は wh-? type の FS との borderline case である。

‘The fact is,’ said Gabriel, ‘I have just arranged to—’
‘Go where?’ asked Miss Ivors. (J. Joyce)

(b) Less closely connected with preceding sentences

I want to see you tonight. Usual time and place. (N. Lewis)

'I can see him so plainly,' she said, after a moment.
'Such eyes as he had : big, dark eyes!' (J. Joyce)

(3) Answers to questions

この部類の FS のうち最も代表的なものは yes-no question に対する Yes や No である。これらはそれだけで文をなし、またいわゆる sentence adverb などを伴うことも多い。英語の Yes や No の機能は複雑でこれまた脈絡の手をかりないで明らかにすることが不可能な今一つの言語現象である。一つだけ例をあげると

'Shall I take you away with me and make a man of you ?'
'No no no no no no no.' (G. B. Shaw)

もちろん Salmon (1963) が指摘しているように sentence adverb (Salmon は No や Yes も含めている) だけを含む answer も多くみられる。

'Would you like me to ?'
'Naturally.' (N. Coward)

その他の副詞類の occurrence が多いことは言うまでもない。

'You're a book publisher ?'
'In a way.' (N. Lewis)

その他種々の supplementary or additional answer が FS であられ、そのあるものは borderline case である。また of course, sure, certainly, not at all などのきまり文句の answer もここに分類される。wh- question に対する answer もこの部類に含めることができる。Bowman はこれらは "restate the interrogatives and add supplementary information to the major sentences" (Bowman, 1966 : 43) と説明している。

'Who?' said I.
'Father Flynn.' (J. Joyce)

'And good luck with your-what do you do ?'
'Selling.' (A. Miller)

(b) Responses to requests, commands, statements, etc.

(a) の場合と類似しているが、(a) は疑問文に対する答であるのに対し、(b) は命令文、要求などに対する応答である。

'Show him up—and I'm at home to anyone who call.'
'Yes, my lady.' (O. Wilde)

'Don't forget to empty your pockets of paper and things.'
'Oh, no.' (R. C. Sherriff)

このように (a) と同様, Yes や No もあげられる。

'Thank you for the coffee beans.'
'Nothing baby. Nothing.' (E. Hemingway)

'It's very kind of you to bring him home,' she said.
'Not at all,' said Mr Power. (J. Joyce)

上にあげた例は単純な応答としてのきまり文句であるが, 単なる応答ではなく, 聞き手 (厳密には聞き手一話し手) 自身の意見が表現される場合 (すなわち, response sentence でありながら stimulus sentence に近いもの) の FS は borderline case で, はっきり分類できないものもある。

(c) Repetition or restatement type

2. (a) Question と同様, answer や response の場合にも先行する文 (相手の発話) 中の語句をそのままくりかえすか, 別の語句などで restate されることがある。

'Black pigs or white pigs?'
'White pigs.' (R. C. Sherriff)

'Opportunity is tremendous in Alaska, William. Surprised you're not up there.'
'Sure, tremendous.' (A. Miller)

'He'll command the Battalion one if-'
'Yes, if!' (R. C. Sherriff)

(dubiously) That will depend.
(bewildered) Depend! (G. B. Shaw)

次の例は相手の発話中の語句を別の語句で restate する場合である。Fowler (1965) で comment と言われているものに当る。

'He says he's in love with me.'
'The dirty old man.' (W. S. Maugham)

'That's the way it begins,' said the old man.
'The thin edge of the wedge,' said Mr Henchy. (J. Joyce)

(4) Situational

これまで扱ってきた FS はだいたい話される英語、書かれる英語の別なく当てはめられるが、situational fragmentary sentences は原則的に書かれる英語にはみられない。というのは、脈絡は言語的脈絡と非言語的脈絡に分けることができるが、非言語的脈絡はすなわち場面(situation)でありいわば発話がおかれている物理的状況、時とか場所とか話し手や聞き手の身振りなどを意味する。したがって、書かれた英語たとえば文学作品では、ある FS を補足する situation はほとんど全部言語的手段によって与えられる。すなわち conceptualization of a situation (Langacker, 1968:88) が行なわれる。

言うまでもなく、あらゆる FS は程度に差はあっても、その場面に依存しているが、ここで situational FS というのは場面が非常に強く作用しているために FS の形をとる文、すなわち、その場面の外では存在し難いかまったく別の機能を果す FS のことである。このような FS は日常の会話などでも普通にみられるもので、Salmon の situation utterances に含まれるものである。Salmon (1963) にあげられている例を示すと All tickets, please. / This way, please. / Game and set.

また Bowman (1966:60) にはスライド映写を見ている人々の発話として次のような例があげられているが、これらは明らかに situational FS である。Lovely. / Very nice. この他、日常話される英語には豊富な例がみられる。書かれる英語では、たとえば写真の情景などを説明する場合のメモにつかわれる FS も、写真が場面を補っているので、ここに分類することができよう。それと類似のものに、看板などに書かれた FS がある。

II. Independent Fragmentary Sentences

前述のように、あらゆる文には脈絡の影響が及んでいる。この点については当然 FS も同じであるが、FS には脈絡との関係が dependent FS ほど緊密でない、したがって独立性がより強い FS がある。仮りにこれを、Bowman にしたがって、independent fragmentary sentence と呼ぶ。ここで独立性と言うのは今までの議論からも分るように相対的であって、dependent FS より independent FS の方がより独立性が強いが、一般的に FS より S + P 形式の文の方が独立性が強い。言いかえれば、文として独立に機能を果せる(ひとり立ちできる)程度にはいろいろな段階がある。

この独立性には少くとも二つの要因が働く。一つは addresser の内面的要因であり、他の一つは外面的要因、すなわち脈絡の影響である。たとえば感情的表現では、前者の要因が強く働いていると言える。前にも述べたように、感情的表現は、五つの言語的要因のうち addresser の要因が一番強く作用したもの(いわば「自己中心の発話」)で、脈絡から独立しようとする傾向がある。すなわち、exclamatory FS は脈絡との関係が dependent FS に比較してより緊密でなく、そのことがまさに exclamatory FS の特徴であり存在理由である。実際の言語現象においては、dependent FS のうちのたとえば answers to questions の中でも exclamatory FS があると考えられるが、それらはいくつかの要因が同じ程度に作用した文で borderline case である。いずれにしても、FS の分類においてはある程度の

borderline case を認めない訳にはいかない。

感情的 FS と似たものに、「原始的」、論理性のとぼしい、ぼんやりした内容を表わす FS がある。それは前述のように、深層構造により近い形をした文と言うことができ、子供の言語 (cf. Greene, 1970) や monologue の言語などに密接に関係する。(さらに Jakobson, 1956: 72-4 を参照。)

次に独立性を脈絡の影響という点からみるならば、ある FS と脈絡との関係が緊密でないということは、その FS に影響を与える脈絡の範囲が広いということとだいたい同義である。したがってこのような FS の談話分析はしばしば大きな脈絡を検討することにより行なわなければならない。

independent FS は、その核 (nucleus) に意味も形式も凝集されたもので、nuclear or crystallized FS とでも言うことができようか。Fowler (1965) の 'Verbless Sentences' のうち 'Dramatic climax', 'Pictorial' そして 'Aggressive' などこのグループに入れることができる。さらに注目すべきは、この種の FS はメモ、本や映画などの題名、見出し (cf. Straumann, 1935), さらに詩などの言語と類似点がある。

以上述べてきたことから明らかなように、この種の FS の議論は文体論と密接な関係があるが、それは将来の課題としたい。

さてこのグループの FS をさらに分類することは非常に難しいことである。最も簡単だが発展性があるように思われる方法としては、言語の今一つの重要な要因である形式 (form) を基準にして、最も単純な形式のもの ('most disjunctive' type of message) (Leech, 1966: 91) から最も複雑なものまでならべることである。そこで一つの試みとして、まず形式上から independent FS を分類して将来の検討に備えたい。もちろんこのような形式上の分類は他の種類についても同じように実施できる。

(1) Interjection

Interjection だけからなる FS は、Nida (1960), Sweet (1891-98) などを参照して次のように三つに分類することができる。

(a) Oh! / Ah! / Aha! / Dear me! / My word! / Hm!

(b) Lo! / Hush! / Hello! / Hallo!

(c) Booh! / Hoot! / Miawo! / Peep! / Splish-Splash! Splish-Splash!

(K. Mansfield)

(2) (D=Determiner) + Nom (inal) + (!)

War. He hated war.

(N. Lewis)

この例を I (2) Additions to preceding sentences とくらべて異なる点の一つは、言うまでもなく FS が major sentence に先行していることである。このことは、言語も時間の経過にしたがって進行する人間活動である (書かれた英語では左から右への進行) という明白な事実がある以上、重要な差異である。このことはまさに、このような isolated noun の文としての存在理由またその文体的効果に関係することである。

Cards! cards! The table was cleared. Villona returned quietly to his piano and played voluntaries for them. The other men played game after game, flinging themselves boldly into the adventure. (J. Joyce)

'I'll be back for tea, mater,' said Reggie weakly, plunging his hands into his jacket pockets. Snip. Off came a head. Reggie almost jumped. 'I should have thought you could have spared your mother your last afternoon,' said she. Silence. The Pekes stared. They understood every word of the mater's. (K. Mansfield)

You! You and I, man. I! I!! I!!! (G. B. Shaw)

これらの例をみても分かるように、このような一語文を S + P 形式の文の省略形として説明することがいかに不適當かは明らかである。第一、孤立している名詞が元來、主語であるか補語や目的語であるかでさえ判然としない場合が多く、それがこの種類の FS の特徴である。

(3) (D) + Adj(ectival) + Nom + (!) or Nom + Adj + (!)

これは(2)と本質的に変りはない。(2)と同様書かれる英語によくみられるタイプである。

The same room. Nine o'clock. Nobody present ... (G. B. Shaw)

Poor old Mother! (K. Mansfield)

I crammed my mouth with stirabout for fear I might give utterance to my anger. Tiresome old red-nosed imbecile! (J. Joyce)

(4) Nom + Adv(erbial) + (!) or Adv + Nom + (!)

There was more to it than that. Yes, father. That is true, father. Perhaps, father. No, father. Well, maybe yes, father. You know more about it than I do, father. (E. Hemingway)

Nearly the half-hour! She stood up and surveyed herself in the pier glass. (J. Joyce)

(5) (How, etc.) + Adj or Adv + (!)

このグループの大部分は感嘆文である。

(a) Adj + (!)

Wonderful! / Good! / Splendid! / Impossible!

(b) Adv + (!)

Admirably! Admirably! (O. Wilde)

(c) How + Adj or Adv + (!)

How jolly! / How very strange!

(6) What + (D) + (Adj) + Nom + !

これは言うまでもなく感嘆文の公式である。

What a very strange arrangement! (O. Wilde)

What fragrance in this room! (A. Miller)

What impertinence! (G. B. Shaw)

What an end! (J. Joyce)

(7) Nom (as Subject) + Verbal, Adj, etc.

これは Leech が SC (subject + complement), SPn (subject + non-finite predicator) などと説明し (Leech, 1966), また Jespersen が nominal sentence (Jespersen, 1924) と呼んでいるものに当る。このタイプは伝統文法では述語動詞 be 動詞の省略と説明されることが多い。英語におけるこのような FS の occurrence は高い。

All his long years of service gone for nothing!

All his industry and diligence thrown away! (J. Joyce)

'No,' said Gabriel, turning to his wife, 'we had quite enough of that last year, hadn't we? Don't you remember, Aunt Kate, what a cold Gretta got out of it? Cab windows rattling all the way, and the east wind blowing in after we passed Merrino. Very jolly it was. Gretta caught a dreadful cold. (J. Joyce)

On both occasions I acted conscientiously, and told my patients the brute truth instead of what they wanted to be told. Result, ruin. (G. B. Shaw)

Here he was! And nervously he tied a bow in front of the mirror, jammed his hair down with both hands, pulled out the flaps of his jacket pockets. Making between £500 and £600 a

year on a fruit farm in—of all paces—Rhodesia. No capital. Not a penny coming to him. No chance of his income increasing for at least four years. As for looks and all that sort of thing, he was completely out of the running. (K. Mansfield)

(8) Other types

その他 independent FS であるが、以上のいずれにもはっきり分類できないもの、borderline case, さらに混合型がある。例を二つだけ示すと

I, I, I took the blows in my face and my body! All of those deaths! The long parade to the graveyard! Father, mother! Margaret, that dreadful way! So big with it, it couldn't be put in a coffin! But had to be burned like rubbish!

(T. Williams)

And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden-party if they had ordered it. Windless, warm, the sky without a cloud. (K. Mansfield)

(9) Formula

脈絡その他の要因に関係なく、英語を話す社会で FS の形をもつ習慣となっているきまり文句 (formula or stereotyped expression) が挨拶や諺にみられる。例は容易に集めることができる。

Thanks. / Thanks very much. / Many thanks. / Good morning. / Good afternoon. / A Merry Christmas. / A Happy New Year.

First come, first served. / No pains no gains. / Like father like son.

その他種々ある。

以上の FS の分類をまとめると。

I. Dependent Fragmentary Sentences

(1) Questions confirmatory, supplementary, etc.

(a) Repetition or restatement type

(b) Wh-? type

(2) Additions to preceding sentences

(a) Closely connected with preceding sentences

(b) Less closely connected with preceding sentences

- (3) Answers, responses, etc.
 - (a) Answers to questions
 - (b) Responses to requests, commands, statements, etc.
 - (c) Repetition or restatement type
- (4) Situational

II. Independent Fragmentary Sentences

- (1) Interjection
- (2) (D=Determiner) + Nom + (!)
- (3) (D) + Adj + Nom + (!)
- (4) Nom + Adv + (!) or Adv + Nom + (!)
- (5) (How, etc.) + Adj or Adv + (!)
- (6) What + (D) + (Adj) + Nom + !
- (7) Nom (as Subject) + Verbal, Adj, etc.
- (8) Other types
- (9) Formula

(1970年11月30日)

註

- (1) ここに述べた考えを実際の文学作品に応用した結果は筆者の「J. ジョイスの *Dubliners* におけるいわゆる Fragmentary Sentences について」(言語学的考察) (『安藤一郎教授退官記念論文集』[1971年3月出版予定]に寄稿)を参照していただきたい。
- (2) このことに関して、Firth の意見を一つだけ引用すれば
 "Attention must first be paid to the longer elements of text — such as the paragraph, the sentence and its component clauses, phrases, pieces and lastly, words if they are institutionalized or otherwise established.
 In dealing with such longer elements, notional generalizations are admissible in addition to the formal linguistic statements characterizing the categories...References to the non-verbal constituents of the situation are essential to the complete description of the verbal context, i. e. the linguistic text and its elements." (Firth, 1957b: 18)
- (3) さらに Jakobson & Halle (1956) を参照。
- (4) cf. "For the description of a language to be of the greatest use, it must account for contextual as well as formal patterns" (Halliday, McIntosh & Strevens, 1964: 40)
- (5) Bowman (1966) が発表される前、筆者はこれを contextual FS あるいは situational FS と呼んで (BA thesis, 1961), absolute FS または independent FS に対比させていたが、ここでは Bowman の用語を借用する。

REFERENCES

- Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York.
- Bowman, E. (1966). *The Minor and Fragmentary Sentences of a Corpus of Spoken English*. Indiana.
- Chomsky, N. (1957). *Syntactic Structures*. The Hague.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Mass.
- Enkvist, N. E., Spencer, J. & Gregory, M. J. (1964). *Linguistics and Style*. London.
- Firth, J. R. (1957a). *Papers in Linguistics 1934-1951*. London.
- Firth, J. R. (1957b). A synopsis of linguistic theory. 1930-1935. *Studies in Linguistic Analysis*. 6. 14 : 1-32.
- Firth, J. R. (1964). *The Tongues of Men and Speech*. London.
- Fodor, J. A. & Katz, J. J. (1964). *The Structure of Language*. New Jersey.
- Fowler, H. W. (1965). *A Dictionary of Modern English Usage*. second ed. Oxford.
- Gardiner, Sir A. (1960). *The Theory of Speech and Language*. second ed. Oxford.
- Greene, J. (1970). Rationalists and empiricists. *The Times Literary Supplement*. 23 July 1970.
- Halliday, M. A. K., McIntosh, A. & Stevens, P. (1964). *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. London.
- Harris, Z. S. (1961). Discourse analysis. *Language*. 28. 1-30.
- Hendricks, W. O. (1969). Three models for the description of poetry. *Journal of Linguistics*. 5. 1-22.
- Hockett, C. F. (1958). *A Course in Modern Linguistics*. New York.
- Jakobson, R. & Halle, M. (1956). *Fundamentals of Language*. The Hague.
- Jespersen, O. (1924). *The Philosophy of Grammar*. London.
- Jespersen, O. (1909-47). *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Copenhagen.
- Jespersen, O. (1937). *Analytic Syntax*. London.
- Langacker, R. W. (1968) *Language and its Structure*. New York.
- Leech, G. N. (1966). *English in Advertising*. London.
- Lyons, J. (1966). Firth's theory of meaning. In *Memory of J. R. Firth*. edited by C. E. Bazell, J. C. Catford, M. A. K. Halliday & R. H. Robins, London.
- Malinowski, B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. Supplement to Ogden, C. K. & Richards, I. A. (10th ed. 1966). *The Meaning of Meaning*. New York.
- Nida, E. A. (1960). *A Synopsis of English Syntax*. Oklahoma.
- 大塚高信編 (1970). 新英文法辞典 (改訂増補版), 東京.
- Salmon, V. (1963). Sentence types in modern English. *Anglia* 81. 23-56.
- 佐々木 達 (1966). 言語の諸相, 東京.
- Sledd, J. H. (1959). *A Short Introduction to English Grammar*. Chicago.
- Straumann, H. (1939). *Newspaper Headlines*. London.
- Sweet, H. (1891-98). *A New English Grammar*. Oxford.
- Ullmann, S. (1962). *Semantics : An Introduction to the Science of Meaning*. New York.

Summary

On 'Fragmentary Sentences' in English

Shoji MIYAI

The main purpose of this paper is to clarify the *raison d'être* of fragmentary sentences in English. They have not been discussed adequately in traditional grammar in spite of their frequent occurrences in the language. More specifically, this is an attempt to classify fragmentary sentences in terms of such linguistic factors as addresser, addressee, message, form and context (i.e. the degree of dependence of fragmentary sentences upon context) and to show that they are grammatically acceptable. The tentative classification of fragmentary sentences is as follows :

I. Dependent Fragmentary Sentences

- (1) Questions confirmatory, supplementary, etc.
 - (a) Repetition or restatement type
 - (b) Wh- ? type
- (2) Additions to preceding sentences
 - (a) Closely connected with preceding sentences
 - (b) Less closely connected with preceding sentences
- (3) Answers, responses, etc.
 - (a) Answers to questions
 - (b) Responses to requests, commands, statements, etc.
 - (c) Repetition or restatement type
- (4) Situational

II. Independent Fragmentary Sentences

- (1) Interjection
- (2) (D=Determiner) + Nom + (!)
- (3) (D) + Adj + Nom + (!)
- (4) Nom + Adv + (!) or Adv + Nom + (!)
- (5) (How, etc.) + Adj or Adv + (!)
- (6) What + (D) + (Adj) + Nom + !
- (7) Nom (as Subject) + Verbal, Adj, etc.
- (8) Other types
- (9) Formula